

## 忘れえぬ言葉

二十五年前、県庁での仕事は児童福祉にかわった。そこでなされてきた仕事は気に入らない、私は一気に変えようと考えた。

補佐役の小池万次郎さんが私を引きとめて言った。「一年間は今まで通りにして、一年過ぎたら、課長の思い通りにされるがよい」。思い上がっていた私でも、この忠告はうれしくからだにしみていった。その後、職場をかわるごとに、私はこの言葉を思い出した。小池さんは後に竹田市の助役にこ乞われるが、地道な人材とつくづく思い出す。

同じ課に平職員で保田君がいた。目立たない立場の人だ。大きな機構では、たとえ能力はあっても、そうした立場におかれる者が作られるものである。某日、彼がきりこんできた。「課長、あなたは本気に施設の子供たちを心配していますか」と。「本気だ」と答えさす気迫があった。

彼はつぎつぎと提案し、私は一つずつ実現していった。彼の提案はすべて人間を見

つめる温かいものが流れていたから。そのころの県政は福祉に一銭も出せるかといった「福祉冬の時代」だった。しかし、彼の人道主義は仕事になっていく。ここでの列挙を控えるとして、彼の仕事がそのまま今に続いているのが幾つもあるのだ。

私の福祉上の創意はほとんどが職員の温かい胸から出たものばかり。彼らはいいわせたように出世のコースにのれなかった。文通も絶えた。しかし、小は小なりに彼らの頭上に輝くものを、私は見る。

恩師下村湖人は私に示された。「職務上の上位者が人間としても、知識技能の上でも上位者であることは極めて望ましい。しかし、現実はそのでない場合が多い。この現実を謙虚に認識するところに、職務上の上位者が上位者としての責任を果たす道が残されている。吉田君、どうかね」。

(一九八五年六月三日)